

焼岳の火山活動解説資料

気象庁地震火山部
火山監視・警報センター

<噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から1（活火山であることに留意）に引下げ>

焼岳では、3月中旬以降、地震活動は低調に推移しています。

このことから、火山活動は3月上旬の地震増加前の状態に戻り、想定火口域から概ね1 kmの範囲に影響を及ぼす噴火の可能性は低くなったと考えられるため、本日（18日）11時00分に噴火予報を発表し、噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から1（活火山であることに留意）に引き下げました。

防災上の警戒事項等：

山頂付近を含む想定火口域内では、突発的に火山ガス等が噴出する可能性があります。登山する際は、火山活動の異変に注意するとともに、ヘルメットを着用するなどの安全対策をしてください。また、噴気地帯にはとどまらないでください。

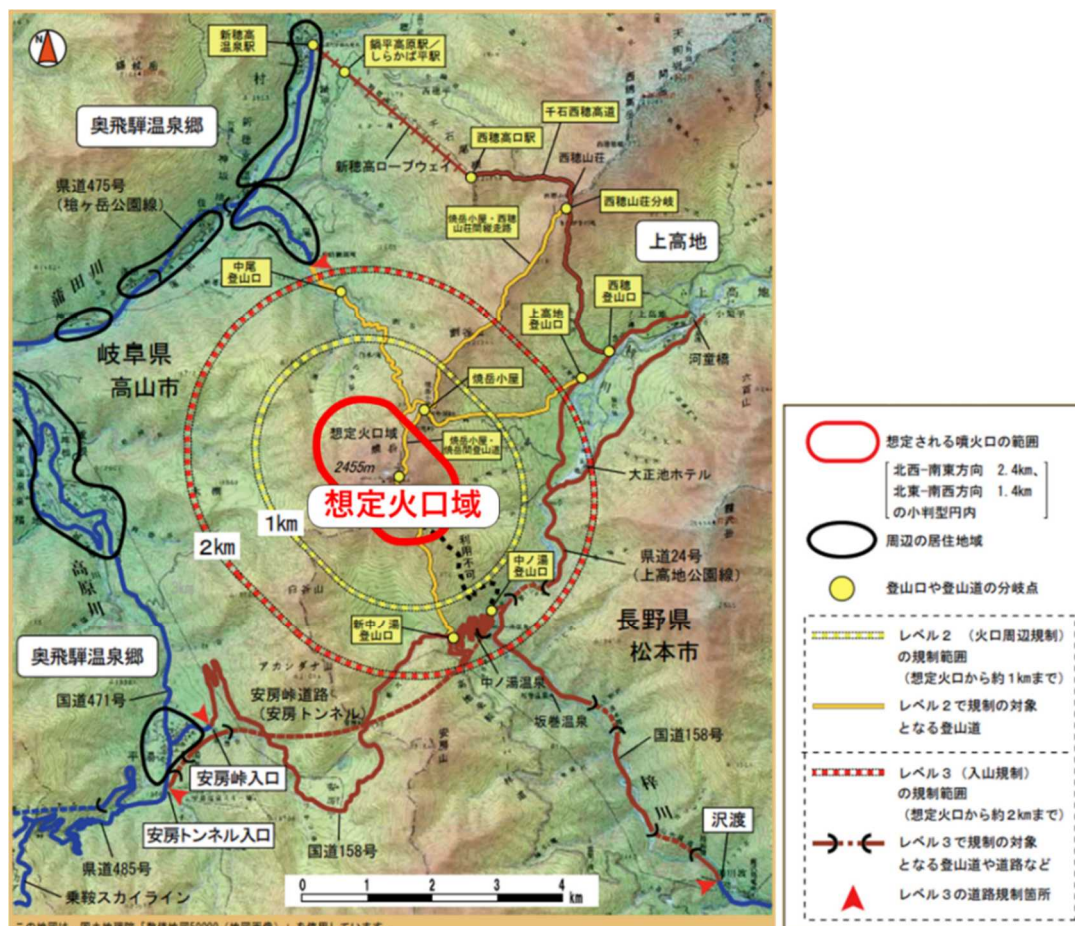


図1 焼岳 想定火口域

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、北陸地方整備局、国土地理院、京都大学、名古屋大学、東京大学及び国立研究開発法人防災科学技術研究所のデータも利用して作成しています。

資料の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図 50mメッシュ（標高）』『数値地図 25000（行政界・海岸線）』『電子地形図（タイル）』を使用しています。

○活動概況

焼岳では、火山性地震が2025年3月上旬に増加しましたが、その後少ない状況が続いています。傾斜計による観測では、3月8日に山頂方向の隆起を示すわずかな傾斜変動が観測されましたが、その後火山活動によるとみられる変動は認められません。また、山頂付近の噴気の状況に特段の変化は認められません。

これらのことから、想定火口域から概ね1 kmの範囲に影響を及ぼす噴火の可能性は低くなったと判断し、本日（18日）11時00分に噴火予報を発表し、噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から1（活火山であることに留意）に引き下げました。

GNSS連続観測では、山頂付近での緩やかな膨張を示すと考えられる変化は継続しており、焼岳周辺では数年おきに震度1以上を観測する地震を含む活発な地震活動がみられることから、中長期的に焼岳の火山活動は高まってきていますので、今後の火山活動の推移に注意が必要です。

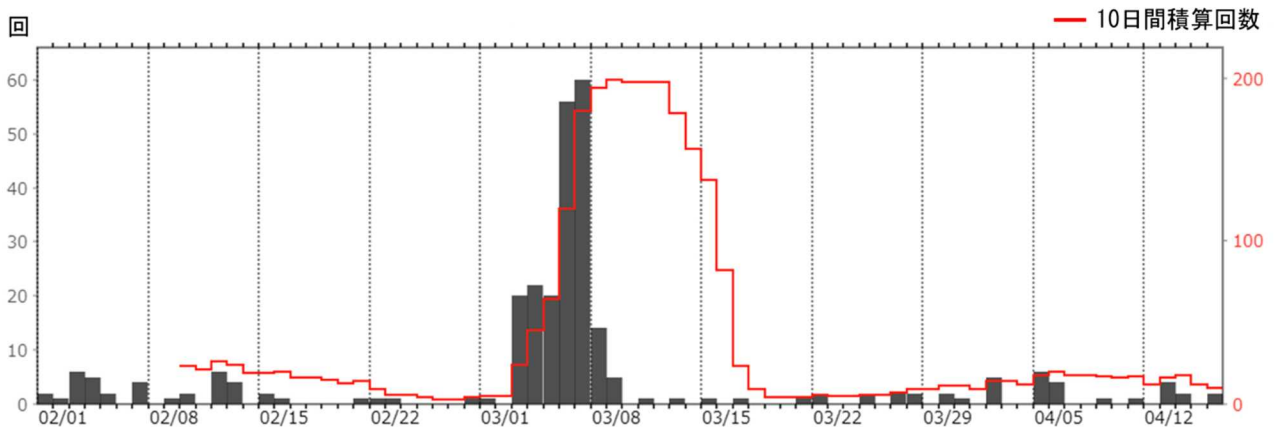


図2 焼岳 山頂付近の日別地震回数（2月1日～4月16日）

3月3日から9日にかけて山頂付近を震源とする微小な火山性地震が増加しましたが、その後少ない状況が続いています。

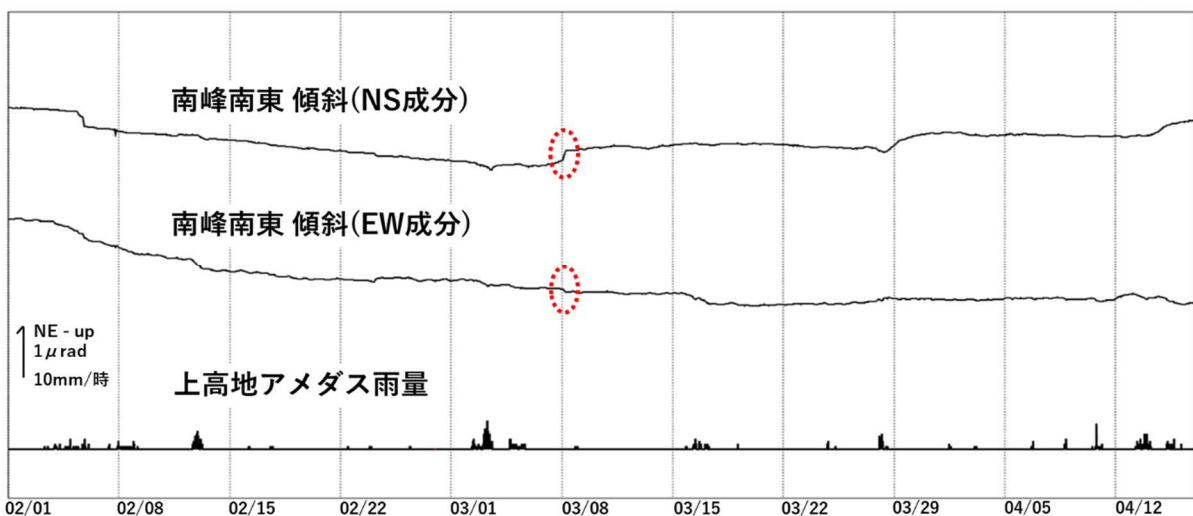


図3 焼岳 南峰南東観測点における傾斜データ（2月1日～4月16日）

傾斜計による観測では、3月8日に発生した山頂方向の隆起を示すわずかな傾斜変動（赤破線）以外には、火山活動によるとみられる変動は認められません。

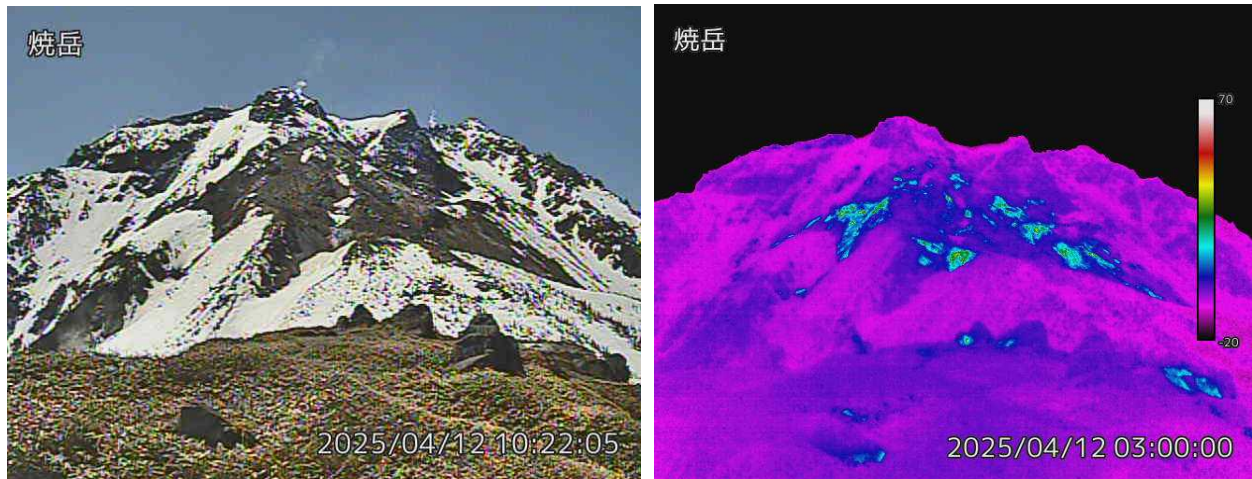


図4 焼岳 中尾峠赤外熱映像カメラによる焼岳の北側斜面の可視画像（左）と地表面温度分布（右）
撮影方向は図5を参照ください。

焼岳山頂周辺および北側斜面には噴気地帯や地熱域が認められますが、噴気の状態に特段の変化は認められません。



図5 焼岳 噴気孔位置（青丸）
図中の緑矢印は、図4の撮影位置と方向を示しています。

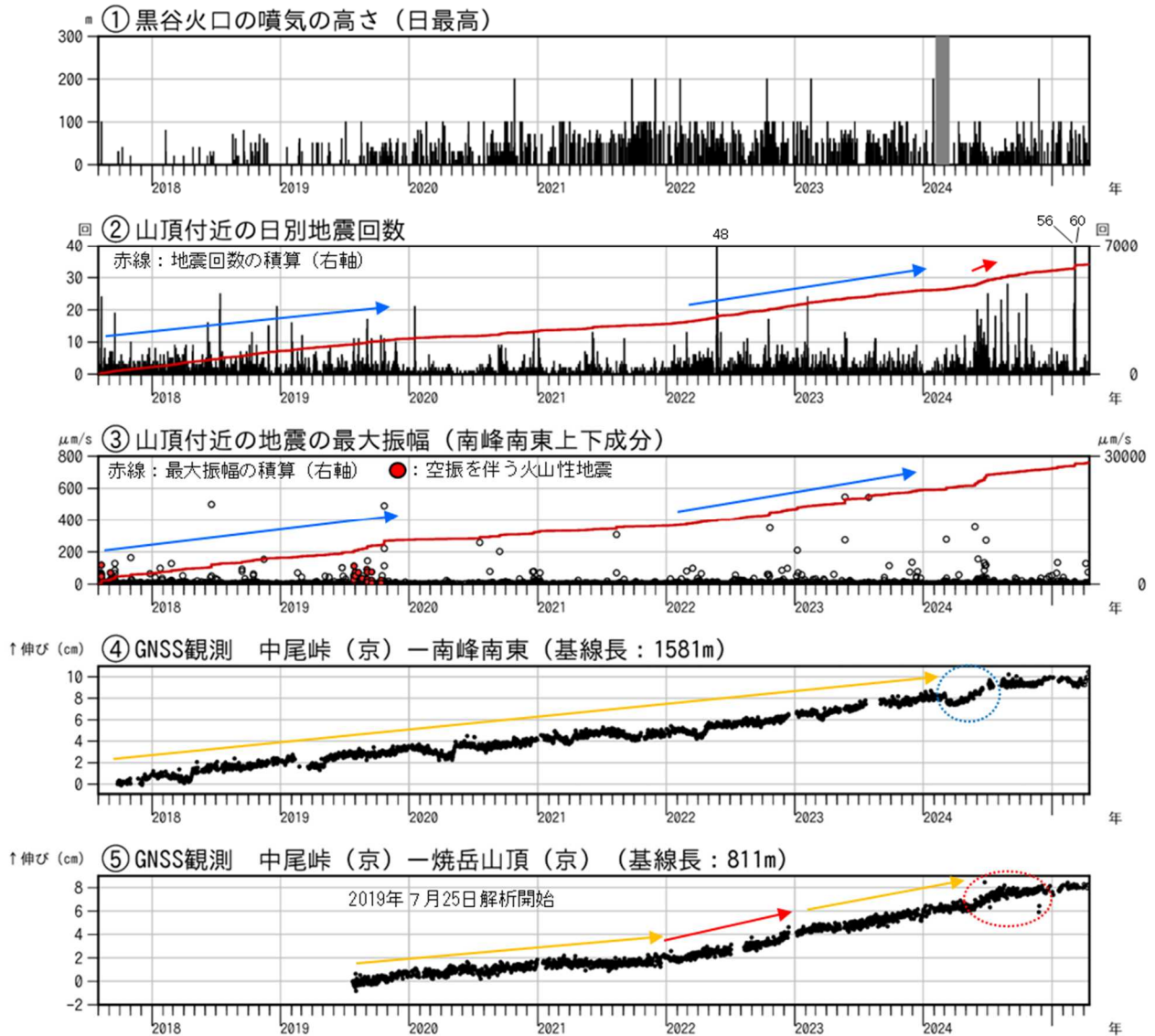


図6 焼岳 火山活動経過図（2017年8月1日～2025年4月16日）

山頂付近の地震とは、南峰南東観測点の上下動振幅 $1.0 \mu\text{m/s}$ 以上、S-P 時間 1.0 秒以内で、焼岳山頂付近の概ね海拔 0 km 以浅が震源と推定される地震のことです。

①灰色の期間（2024年2月5日～3月14日）は欠測を示しています。

④⑤は図7の基線⑥⑧に対応しています。グラフの空白部分は欠測を示します。（京）は京都大学の観測点です。

④の青破線内の変化は、南峰南東観測点の局所的な変動によるものと思われます。

- ・黒谷火口では、2019年夏頃から噴気を観測する日が増えていきます。
- ・2022年1月頃から2023年末まで、山頂付近の地震回数に増加傾向がみられましたが、2017年8月から2019年末の期間にみられた地震活動（積算曲線の勾配）とほぼ同程度です（②③青矢印）。また、山頂付近の微小な地震（焼岳山頂付近の概ね海拔 0 km 以浅が震源と推定される地震）が継続しています。2024年5月下旬以降、時々短期的な増加がみられるなど、やや多い状態となっており（②赤矢印）、2025年3月3日から9日にも増加がみられました。
- ・山頂付近の緩やかな膨張を示すと考えられる変化が継続しています（④⑤橙矢印、赤矢印）。
- ・⑤の基線では、2022年1月頃から2023年2月頃にかけて焼岳山頂（京）観測点の南東進と隆起による伸びの変化率がやや大きくなりました（赤矢印）。また、山頂付近での緩やかな膨張を示すと考えられる変化は、2024年5月下旬からの地震回数の増加に対応してその変化率が増加しましたが、7月下旬からは鈍化しています（赤破線）。

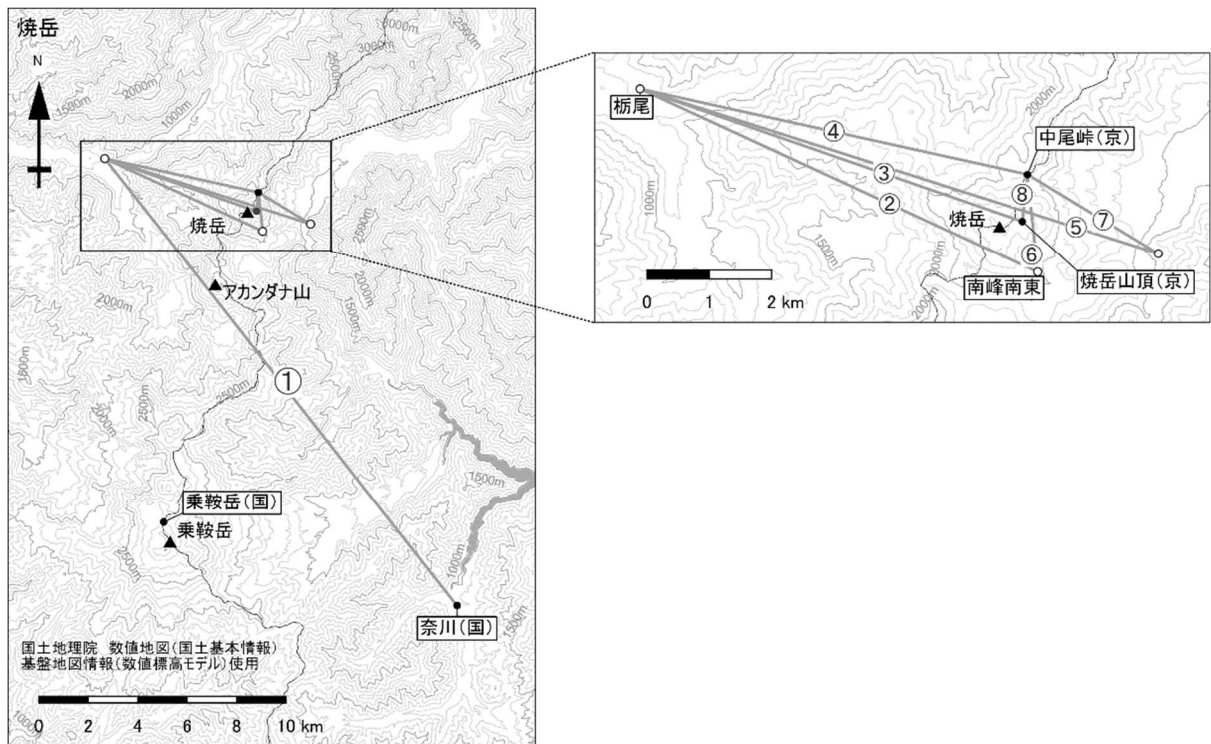
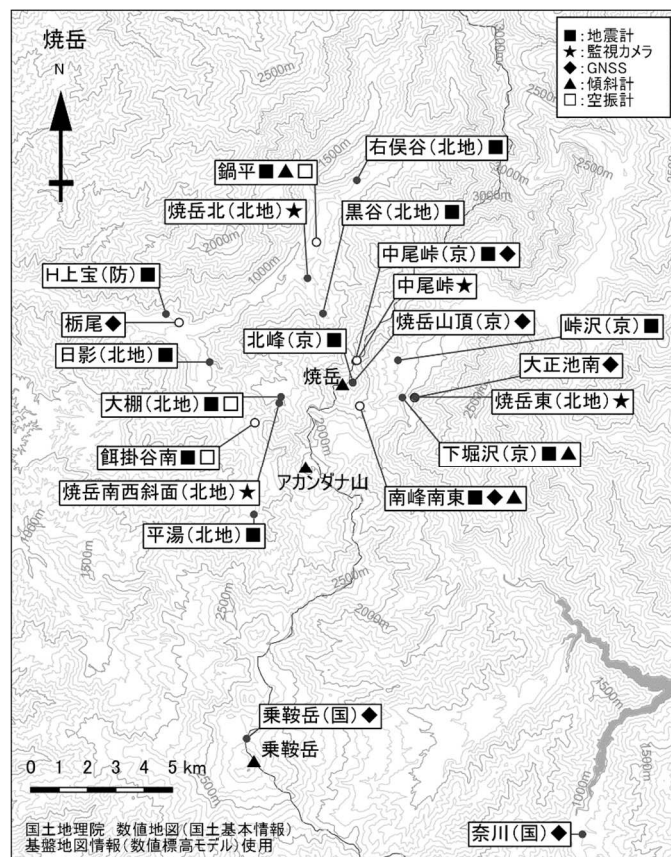


図7 焼岳 GNSS連続観測点配置

白丸(○)は気象庁、黒丸(●)は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

⑥⑧は図6のGNSS基線④⑤に対応しています。

(国): 国土地理院、(京): 京都大学



小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
(国): 国土地理院、(防): 防災科学技術研究所、(北地): 北陸地方整備局、(京): 京都大学

図8 焼岳 観測点配置

○は気象庁、●は気象庁以外の機関の観測点を示しています。

(国): 国土地理院、(防): 防災科学技術研究所、(京): 京都大学、(北地): 北陸地方整備局